

I 法人の運営

- ① 会員数 令和3年3月31日現在
【正会員個人】43人／【特別会員】33団体／【賛助会員】4人
- ② 新事業 かなーちえサテライトの開所(令和3年3月29日開所)

新型コロナウイルス感染症が拡大し、収束の見通しが立たない閉塞感の中で、孤立が深まる子育て世代を支えるため、新しいひろば様式の基、場の安全・安心に十分な留意と予防対策に努めました。妊娠期から子育て期の親たちを、身近な寄り添い方支援を持ってサポートし、相互の交流を図り、地域へ繋げる様々な工夫を実践しました。何より、人と人の間で育ち合う“子どもという生き物”の育ちを尊重し、年齢に応じた遊びの環境を整え、声をかけ、マスク越しに笑いかけ、親たち、地域の人と共に育ちを見守りました。

地域の様々な場や事業が休止等を余儀なくされながらも、各すくすくかめっ子はじめネットワークで繋がる先々と連携を図り、情報を集め、ホームページでの周知、相談、必要に応じた情報提供等を行い、繋がりを育みました。身近な地域の「場」の意義を、しみじみとかみしめる年度となりました。

II 神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえ

コロナ禍における多様な事業展開

・緊急事態宣言解除後(5月までは閉館)は、開館時間内を2部制、各回最大30組(混雑状況を都度ホームページに表示)、消毒清掃を実施し、拠点を開館しました。閉館期間中は、区内公園等を複数のスタッフで見回り、親子への声かけから相談、声を聞き取り、状況を把握しました。毎月定例の公園、プレイパーク(3か所)、外遊び応援タイム(3か所)出張事業を引き続き開催し、拠点を利用しない層への、情報提供や相談等を届けました。

オンライン事業の開催

・これまでのように多数が集う事業開催が難しくなったため、国からの補助金配分を受けてオンライン環境を整えました。それを受けて、人が集う場には来所しにくい人たちに向けて、子育てお話しタイム・マタニティお話しタイム・赤ちゃんが泣いて困ったときの対処法・外遊び交流オンラインタイム・防災啓発タイム等、zoomによるオンライン講座を開催しました。こういった手法の実践を重ねることで、“拠点や支援の場には来所しにくい層”・地域へ向けての新たなアプローチの発掘に繋がりました。

かなーちえサテライトの開所(入江・新子安地区)

・子育て世代人口の多い地区に、かなーちえサテライトを開所しました。年度を通して開所に向けての準備、新スタッフの研修、地域との連携等を進め、開所後、サテライト拠点として機能し、町の居場所として育まれるよう運営について話し合いを重ねました。

就労型社会への移行期にこそ、地域へ繋げる

・就労型社会へと移行する中、拠点利用期間が短くなっている現況や、子育て初期に親として感じる事が、自助・共助に繋がり、一瞬の出会いでも価値があれば、その人が変わっていくことを踏まえ、1回毎の来所がその人・子どもにとって、多様な人や価値観等にふれられるよう働きかけました。

コロナ禍において、家庭でのリモートワークが増えることで、父親の来所に繋がりました。程よい距離を保ちながらの声かけや、同じ子育て中の父親、母親、子ども同士へ繋ぐ等、この時期だからこそその体験の場となるよう働きかけました。

新たなネットワーキング団体への参画

・18区の地域子育て支援拠点のネットワーク“拠点ネット”と、“一万人人子育てフォーラム”という団体が合併した、一般社団法人“ラシク045”の設立(10月)に関わりました。また、市民協働推進センターを運営する市民セクターよこはま・区政推進課の連携により、毎年開講されている「神奈川区地域づくり大学」に参画しました。より広い視野、視座を持って、地域づくり・子育て支援とは何かを学び合い、研鑽し、収獲した知見を発信する過程から、神奈川区の地域子育て支援を見つめ直し、より発展させる数々の機会を得ることができました。

1) 親子の居場所事業

●新規登録者数：789人(前年度3月～5月 臨時休館)

●年間利用者数：18410人(親子利用17215人／支援者1195人)

【父親利用】643人／【祖父母利用】42人／【きょうだい】759組／【プレママパパ】63人

●アウトリーチ総数：2665人(ひろばの利用者数には含まれない人数)

- ・コロナ禍における乳幼児親子にとって、身近な居場所(拠点、近隣施設、すくすくかめっ子等)が閉館するという出来事は、大変な閉塞感に繋がります。開館後は、その時期の気持ちや状況を聞き取り、ひろばに掲示する、対話する等の時間を重ねました。感染拡大予防対策、空気清浄機の導入、消毒できる遊具等の環境整備と、来所時の体温測定・手洗い、消毒の励行を進めながら、「拠点という場の継続」に向けて、区と連携し努めました。
- ・多くの参加者が見込まれるプログラムには、定員を設け、テーマ別の「なかまトーク」は順次再開し、当事者間の語り合い、支え合いを育みました。(療育おやこ・国際交流・双子三つ子・アラウンド40・ひとり親・父親)中でも、「アラウンド20」のなかまトークは、自主開催から、定例のプログラムとして、定着しました。また、シングル親トーク、療育おやこ&うちの子気なるトークにおいては、先輩親をメンター(共感と相談、体験から紡がれる活きた情報提供から、寄り添う人)として配置し、対話を深め、その効果を深く実感することとなりました。
- ・平日でも父親のひろば利用が日常になったことが、コロナ禍での特徴でした。
- ・初来所の契機となるよう、初めまして赤ちゃんプログラム(2回連続)・産後の骨盤体操・親子ふれあい遊び赤ちゃん編等、産後数か月の人を対象とした事業は、参加によりひろば利用に繋がり、数か月後にはひろばの“支え手”として、初来所利用者や、妊娠期の人へサポートする姿がありました。
- ・産前のプログラムを、体験・参加型として、産後の父母たちとの交流タイムを頻繁に設けることで、産後の拠点利用動機に働きかけ、繋げました。
- ・土曜日は学齢期になったきょうだい児が、乳幼児たちと、ごっこ遊びや絵本の読み聞かせをする姿が定着し、大人が距離を保って子どもを見守ることの大切さを伝えてくれました。
- ・拠点に来所しづらい地域においては、2か所の出張ひろば(沢渡三ツ沢地域ケアプラザ・羽沢長谷自治会館)を、各週1回開催しました。また、コロナ禍で、室内ひろばの来所を避けている親子のために、区内公園5か所・プレイパーク3か所で、出前事業を積極的に開催しました。
- ・区と共に、子育て世代の居住率が高い地域における拠点サテライト開設に向けて取り組み、3月末に開所しました。

2) 子育て相談事業

●ひろばや出前等の年間相談件数：3197人／5109件

- ・閉館期間中は、区内の複数の公園等に出向き、そこにいる親子への声かけを通して、相談に繋がりました。また、すくすくかめっ子のネットワークを活かして、各地域の町内会掲示板に「どうしていますか？」ポスターを掲示し、電話相談やメール相談先の情報を伝えました。
- ・敷居の低い日常の場において、何気なく交わされる話の中から、相談に繋がりました。
- ・子育て中の親同士の話が自身の力になるということを実感できるよう、プログラムをトーク形式で行いました。スタッフがファシリテーターとして入ることで、当事者の生の声を聴き取りニーズを拾い、更に事業に繋がっていく循環が生まれました。
- ・利用者支援事業“横浜子育てパートナー”や、子育てサポートシステムとの連携を、日常的に行いました。
- ・多様な相談に応じるため、“かながわ女のスペースみずら”と連携し、相談の場を設けました。スタッフにとっても、拠点だけでは知りえない情報を得ることができました。
- ・マタニティプログラムを定期的に開催することで、妊娠期の漠然とした不安等を、事業を通して把握し、母子保健コーディネーターとも連携しました。

3) 子育て・地域情報の収集と提供事業

- ・広く区民に情報が届くように、ホームページをスマホ版対応に変え、更に検索しやすいよう検討を続けました。事業開催、地域情報を常に更新し、必要と思われる情報を迅速に届けました。
- ・拠点利用人数制限を設ける中、現在の混雑状況がスマホから確認できるように(★マークで表示)しました。
- ・子育て世代に利用者が多い、SNS(インスタグラム・LINE)を開設する準備を進めました。
- ・ホームページにて、すすくかめっ子はじめ近隣の居場所情報の開閉状況、オンライン相談・オンライン交流タイム・相談タイム等の情報を伝えました。
- ・オンライン環境を整え、多機能が連動して多くの情報が提供できるよう実践の機会を重ねました。
- ・昨年度に続き、子育て家庭応援事業「ハマハグ」の申請を行い、これまでのネットワークを基に、新たに20件協賛店舗を増やしました。

4) 子育て支援者のネットワーク事業

- ・区内全域で開催しているすすくかめっ子と、コロナ禍での開催状況の確認、相談等丁寧に関わり、連携しました。
- ・ケアプラザや地区センターとの共催事業は、会場毎の感染状況の対策に応じて、地域のニーズに沿ったプログラムを検討し、開催しました。
- ・コロナ禍だからこそ活動を続けたい、という思いの中で、大人数でも参加できるようオンラインを活用し、ネットワーク交流会や学び合いの機会を設けました。(プロジェクトマネジメント・広報術・外遊び)
- ・地域で活動している個人・グループによるプログラムを、ひろばで開催しました。
- ・地域のネットワーク活動に参画することで(18区拠点ネットワーク・市民協働推進センター・ラシク045一般社団法人)、新たな分野の企業やNPO、団体と繋がる機会を得ました。
- ・地域課題を目的とするネットワーキンググループと共に、課題実現に向けて効果がある方法を探りました。(療育おやこ・国際関係)

5) 子育て支援に関わる人たちの人材育成・活動支援事業

●【学生・職員の実習】19人／【学生ボランティア】2人／【地域ボランティア】延46人

- ・地域から始まった「親子のふれあい体験授業」は、中学校2校に加え、新たに高校1校で開催しました。地域で授業を支えてくれる方々や中学校教諭、施設と共に、コロナ禍で開催するための方法を検討した上で行いました。直接親子とふれあう機会が持てなかった授業は、ひろば利用の親子の協力を得て、リアルな姿や声を映像で届けることができました。
- ・父親育児支援講座を開催しました。(3回)終了後は、父親主体で行うトーク会へと繋げ、定例開催となりました。
- ・オンラインお話タイムを開催し、拠点という場には来所しにくい子育て中の親、地域の人に届けました。
- ・毎年行なっていた区と共催の外遊び活動支援事業は休止となったため、新たに、オンラインで外遊びネットワーク交流会を開催し、コロナ禍での外遊びについて学ぶ機会を設けました。また、新設されたコットンハーバー地区の外遊びグループと交流する機会にもなりました。
- ・区と共に、上三枚地区と話し合いを重ね、45か所目のすすく子がめ隊の立ち上げとなりました。
- ・スタッフは、オンラインを活用し、様々な研修に参加しました。
- ・横浜市第5次男女共同参画行動計画策定に向けたオンラインパブリックコメント会(ラシク045主催)・他団体と共催フォーラムへ、ひろば利用者・地域グループへ声をかけ、より広いネットワークへの参加機会に繋がりました。

6) 子育てサポートシステム神奈川区支部事務局運営事業

●令和3年3月末日付会員数：【利用会員】864人／【両方会員】74人／【提供会員】144人

●事業：【入会説明会参加者】245人／【援助実績】3685件／【情報交換・交流会】1回

- ・区、利用者支援事業と連携し、様々な問題や、緊急を要するケースに対応することで、どの支援にも繋がりにくい狭間の支援事業の意義を実感しました。
- ・様々なサービスが増えていく中、事業の主旨をしっかりと伝え、理解を得ることが重要となるため、入会説明会や事前打合せ等では、「有償の支え合い活動」「ボランティアの気持ちで活動」している会員であることを強調しました。
- ・提供・両方会員向けの交流会を開催し、普段の援助活動で感じる様々な思いを意見交換し、理解を深めることができました。
- ・コロナ禍で、安心安全に援助活動が行えるよう、依頼内容をしっかりと聞き取り、事前打合せ時には、活動中の注意点等を具体的に伝えました。
- ・局への本部移管に伴い、18区のワーキンググループを基に、様々な話し合い、作業を積み重ね準備を進めました。
- ・「ファミリーサポート事業」の価値を、改めて学び、確認するオンライン研修に参加し、他自治体の実績からも、多くを学び、取り組む姿勢の熱量を感じ取る、実りのある時間になりました。

7) 利用者支援事業

●年間相談件数：170件

- ・個別支援と地域連携を2本柱に、子育て家庭を支えるために、地域と連携しました。相談は、コロナ禍での相談窓口として継続、電話相談を活用しました。ひろばや地域と共に、経過を見守りました。
- ・地域との共催事業は、コロナ禍において事業を継続するための工夫、実施方法の変更等、これまでの関係性をベースに検討を重ね、新たな事業も生み出しました。(保育・教育コンシェルジュ説明会のオンライン化、ホームページでの情報発信、幼稚園情報紙の発行等)
- ・地域に子育て家庭の“伴走者”を増やすことも、事業の目的の1つです。コロナ禍で、地域のすくすくかめっ子の支え手から、近隣親子の様子を気にかける声が、拠点に集まりました。拠点からは、コロナ感染症予防対策の発信や、相談窓口の周知に、支え手を通して掲示板を活用する等、双方向のネットワークで取り組みました。
- ・子育て世代包括支援センターが本格スタート。区福祉保健センターと地域子育て支援拠点、地域との連携で、妊娠中から子育て期の切れ目のない支援に取り組みました。
コロナ禍での産前産後のサポートについて、区と共に、状況の共有と検討を行い、拠点事業に反映しました。

Ⅲ すくすくかめっ子事業

●新しいかめっ子の開所：令和3年3月11日、上三枚地区に、45か所目のかめっ子が開設しました。

●訪問活動：11地区

●季刊紙発行：4回。コロナ禍で、感染リスクへの対策を取りながら、各地区の工夫の様子を掲載しました。

●かめっ子活動の継続に向けて、かめっ子の様子を伝える「かめっ子かわら版」の作成を依頼(2月末)しました。次年度、全かめっ子かわら版の掲示やホームページ掲載等、広報PRします。

●親子のたまり場開催支援：コロナ禍での開催に当たり、留意点について広報し、再開について、それぞれの子がめ隊と一緒に検討しました。

コロナ禍で、親子で利用できる身近な場所として、すくすくかめっ子の再開を望む声が多く聞かれました。また、開催の問い合わせが多いことから、ホームページを利用して、分かりやすく広報しました。

IV 親と子のつどいの広場事業（しゅーくるーむ）

親子が気軽に集い、交流できる居場所を、身近な地域で利用できるよう取り組む。

テーマ「みんなで育ててみんなで育つ」

1) 子育て親子の交流、つどいの場の提供

●新規登録者数：27組（～6月5日 臨時休館）

●年間利用者数：1894人

- ・初来所の人や1組で利用している人への声かけを、常連の利用者が担い、利用者も一緒に広場のことを考えていけるような仕組みが出来上がってきました。利用者が、居心地の良い広場づくりをしていく中で、大きな力となりました。
- ・利用者一人ひとりに合った関わり方（話を聴いてもらいたい・ゆっくり本を読みたい・情報を知りたい等）をスタッフが感じ取り、工夫することで、居心地の良い雰囲気づくりに努めました。
- ・間に消毒・清掃タイムを入れた2部制が定着し、それぞれの時間帯の中で、ライフスタイルに合わせた利用が見られました。感染予防対策を実施していることを利用者が理解し、安心感を持って利用ができると好評でした。
- ・コロナ禍においても開催できるイベントを行い、それがきっかけとなり、利用する親子が増えました。

2) 子育てに関する相談、援助の実施

- ・日頃からの関わりを通して、関係性を築き、相談しやすい雰囲気づくりを行いました。
- ・利用者に合った援助を行えるよう、スタッフ自身が関連施設等に出向き、情報を収集したり、関連する情報を伝える工夫をしました。
- ・広場で起きた様々な事例に関して、スタッフ間で共有し、互いの意見を交換して、しっかりと話し合うことで、一人ひとりが様々な状況に対応できるようなスキルを、身に付けることに繋がりました。
- ・利用者同士で相談・解決できるよう、スタッフがパイプ役となって繋げながら、利用者同士で解決するヒントとなるような文献や情報を提示しました。

3) 地域の子育て関連情報の提供

- ・地域や関係施設、地域子育て支援拠点と連携し、情報収集に努め、利用者が手に取りやすいように掲示したり、各々のニーズに応じて、スタッフから手渡しました。
- ・近隣の福祉法人施設と連携を取り、共催イベントの実施やHPに広場の情報を掲載してもらう等、交流を図りました。

4) 子育て及び子育て支援に関する講習の実施

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------|
| *かなちくタイム 1回（コドモトによる親子で防災を考えるイベント） | 定期プログラム |
| *お外でハロウィン（近隣の老人ホームとの共催イベント） | *ストレッチタイム |
| *手形・足形アート 3回 | *お話会（読み聞かせボランティアグループ） |
| *横浜子育てパートナー来館による育児相談 | *お誕生会 |
| *幼稚園／保育園への入園前座談会 | |
| *お花見イベント | |

5) 地域の子育て関係者、関係機関・団体や行政機関等との連携

- | | |
|---|------------------|
| *福祉保健センター地区担当保健師 | *横浜子育てパートナー |
| *保育・教育コンシェルジュ | *地区センターとの共催企画の実施 |
| *スタッフが、地域の赤ちゃん学級（月1回）・外遊び応援隊（月1回）・地域子育て支援拠点のスタッフを兼任 | |
| *地域の子育て支援連絡会への参加 | |

V 親と子のつどいの広場事業（ほしのひろば）

誰でも、どんな時でも気軽に立ち寄り、のんびり過ごし、他の親子と交流できるよう取り組む。

テーマ「ほっとできる居場所 ☆ほしのひろば」

1) 子育て親子の交流、つどいの場の提供

●新規登録者数：88組（4・5月臨時休館、6月1日より開館）

●年間利用者数：3549人

- ・再開後2部・事前予約制にしたため、利用料を無料にしました。「気軽に行ける」「友だちを誘いやすい」等好評でした。
- ・講師を招いてのプログラムを、全て無くしたことにより、“居場所”としてのひろばが定着しました。
- ・利用者の声に応え、『あかちゃんタイム』を新設し、月齢の近い親子が知り合うきっかけをつくることができました。
- ・「ひろばには行けないけど外遊びなら参加できる」という声も、多く聞かれたため、星野町公園に加え、ポートサイド公園でも外遊びを開催しました。毎回約15組の親子が参加し、外での居場所づくりができました。
- ・昨年度2月にスタートした一時預かり事業は、9月以降利用が増え、月の平均で20組を超えました。身近な地域に、一時預かりの機能があることの意義を感じる1年となりました。

2) 子育てに関する相談、援助の実施

- ・3ヶ月に1度、横浜子育てパートナーの訪問日を設けることにより、利用者が直接、保育園情報等を聞く機会になりました。
- ・YMCA 東かながわ保育園の保育士の協力を得て、毎月先生と話をする時間を設けました。離乳食や生活リズムの相談をし、アドバイスを受け、笑顔になる姿を多く見ることができました。

3) 地域の子育て関連情報の提供

- ・短時間で職場復帰する人が多い地域のため、保育園情報や病児保育の情報等を掲示しました。
- ・外あそびコーナーや地域情報コーナーも設置し、欲しい情報がすぐ見つかるよう工夫しました。

4) 子育て及び子育て支援に関する講習の実施

- ・例年 YMCA 東神奈川保育園の協力で試食会を行っていましたが、今回はサンプルを見ながら管理栄養士の先生の説明を聞き、悩みを相談する「お話し会」の時間にしました。
- ・歯科衛生士の資格を持つスタッフによる、歯科相談の時間を設けました。仕上げ磨きのコツ等を伝え、持参した歯ブラシで親子で歯磨きをしました。区の検診等が休止で不安に思っていた利用者も多く、好評でした。

5) 地域の子育て関係者、関係機関・団体や行政機関等との連携

- ・コットンハーバー地区すくすく子がめ隊合同「ミニミニ運動会」「クリスマス会」
- ・福祉保健センター地区担当保健師・民生委員児童委員・主任児童委員・地域ケアプラザ・区民活動支援センター「地域連携ミーティング」（年2回）